

英語教育実践報告：  
テスト分析を通じてクリエイティブな活動を促す実践事例研究

関戸 冬彦

Educational Report in English:  
Practical Studies for Creating Activities through  
Analyzing Tests in the Language Classroom

SEKIDO Fuyuhiko

Summary:

The main purpose of this paper is to introduce how to use English tests and analyze questions types as an exercise for language studies in the classroom. An approach will be outlined regarding how to analyze several types of English tests, including the English as a Foreign language subject within the National Center Test and the entrance examination for Dokkyo University. In addition, activities for creating the Test of English for International Communication (TOEIC) based on analysis for each part are also introduced in detail.

はじめに

「英語のテストは好きですか」と聞かれて「好きです」「好きで好きでたまりません」と答える学生はそんなに多くはない、いやむしろ、そう答える学生を探すほうが難しい、かもしれない。とはいえ、英語学習と英語のテストとが切っても切れぬ関係であることは、英語が教科として存在することの宿命として、また昨今の資格試験の結果が社会に出ていくための、あるいは社会でより活躍するための、評価の対象となっている風潮と相まって、自明のように思える。本報告はこうした英語のテストをめぐる、テストとはそもそも何なのか、テストは一体何の能力をはかっているものなのか、よい／悪いテストの違いとは

何か、ひいてはよいテストはどうやって作ればよいのか、などを数種類の英語のテストを概観しつつ、テストに対してクリティカルに考え、学ぶことを目的とした授業の実践報告である。対象科目は獨協大学国際教養学部言語文化学科にて開設されている英語演習II（2015年度新設の新カリキュラム対応科目のため今年度の該当年次生は3年生のみに限定された科目）で、履修者登録は22名（うち単位取得要件を満たしたのは21名）であった。本報告では、テストを分析、検証する素材として使った問題、具体的には都立高校入試問題、大学入試センター試験、獨協大学一般入試問題（A方式）、を扱った活動、演習をひとまとまりとして最初に紹介し、その後、世間一般でも認知度の高いTOEICを解体／再構築するという活動、演習を紹介する。さらに、評価方法と履修者からの授業に関するフィードバックも合わせて紹介する。

## 1 テストを分析するとは — 入試問題を用いて

テストとは何かを考える上で参考になる文献、*Language Testing in Practice*をはじめに紹介しておきたい。この中でLyle F. BachmanとAdrian S. PalmerはテストにおけるMisconceptions（誤解）を4つ、Resulting problems（引き起こされる問題）を7つ、挙げている。その主張をごく簡単にまとめるならば、テストは万能ではないし、有名だからといって必ずしもある目的／集団に対して正しく能力をはかることができるとは限らない、という点に集約される。テストが受験者に対して持つ威力は、やはり点数として示される結果があたかも個人そのものの評価であるかのように、眼前に数値として表れてしまうところにあるだろう。そう考えると、いくら尺度が違っていたとしても、また必ずしも適正なテストではなかったとしても、その点数が自分の期待値よりも低ければ受験者としてその結果にいい思いをするはずはなく、能力のなさを嘆き自己否定してしまう可能性もある。そうしたいらぬ誤解を避けるためにも、BachmanとPalmerは言語テストに対し正しい意識、能力を持つよう推奨し、Why it is important to be competent in language testingと題したセクションにおいて、以下のような説明を与えている。

… Language tests can be a valuable tool for providing information that is relevant to several concerns in language teaching. They can provide evidence of the results of learning and instruction, and hence feedback on the effectiveness of the teaching program itself. … For these reasons,

virtually all language teaching programs involve some testing, and hence, language teachers need to be able either to make informed judgments in selecting appropriate language tests or to plan, construct, and develop appropriate tests of their own. (8)

この、テストへの正しい視点を持つことの大切さを説いた言説を履修者たちに理解してもらった上で、数種類の英語のテストをクリティカルに検証していくことにした。

クリティカルに検証するとは言いつつも、最初の具体的なテストはなるべく偏りがなく、履修者にも「テストはやっぱり難しい／よくわからない」という否定的な感覚を持ってもらわないようにするためにも、解答する上での難易度などをも考慮に入れた結果、東京都立高校の入試問題を最初の対象とした。高校入試である点と、受験者の学力の幅が広い公立高校という点がこれを選んだ主な理由である。ただし、リスニングの部分は除いた。教室では解答時間も実際の試験と同じように設定し、その条件で解いてもらった後で、履修者たちには「このテスト／特定の大問、の狙いは何か」、また「英語のどういう能力をはかるテストなのだろうか」と問いかけ、議論してもらい、その後、出題意図が示されているウェブ<sup>1</sup>を紹介し、それぞれの問題が本当にその意図に則っているかどうか話し合ってもらった。つまり、これはどういう意図のもとに具体的テスト問題は作られているのかを知ってもらう活動であり、テストをどういう視点で見るのかを具体例と共に確認したわけである。

次にやってもらったのは、大学入試センター試験の英語の問題である。履修者の中には実際に受験した経験のある学生もいたので、まずはどんな問題があったか話し合いつつセンター試験とはどのような試験であったか、を思い出してもらった。センター試験は微妙ながら年々出題の傾向が変わっているの、履修者たちが受験した時と最新のものとでは若干異なるかもしれないと前置きし、授業では平成26年度本試験の問題を扱った。試験時間は80分だが、さすがに授業時間のほとんどを、問題を解くだけに費やすわけにもいかないので数間にしほりその場でやってもらい、答え合わせなどしながら履修者同士の解答の際の手ごたえなどを述べさせて、残りは授業外にて自分でやっておくこととした。都立高校入試の際は出題、作問の狙いをクラス内での話し合いを経て確認するという部分に留まったが、センターでは自分たちでその狙いを考え、かつ評価してみる、という活動も取り入れた。

やり方としては第1問から第6問まで各自が評価し、最高得点は星3つ、あたかもミシュランのように評価（秀逸で必要かつ有益な問題は星3つ、逆に必要とは思えず違う問題と差し替えるなどしたほうがよいものは無星と判定）し、またその理由などのコメントをつけて、それを次回の授業までにレポートの形でまとめてもらうことにした。翌週の授業ではそれらをもとに意見交換しながら問題の是非を議論してもらった。比較的概ね高評価のもの、第二問や第六問もあるかと思いきや、逆に第一問にある発音問題などは賛否が分かれた。その後、センター試験には公式の講評があることを示し、自分たちが準備したコメントや評価と比べてもらった。紹介した講評は、高等学校教科担当教員の意見・評価<sup>i</sup>と問題作成部会の見解<sup>ii</sup>、である。自明ではあったが、これらの講評は細部にまで事細かに言及したものであり、クリティカルな視点、分析としてはあたかもお手本のように履修者たちの目には映ったことだろう。

都立高校、センター試験とやや公の入試系のテストが続いたが、入試問題分析の最後として本学、獨協大学の一般入試問題A方式（2014年度）を取り上げた。センター試験の時と同様、まずは問題を解いてもらい、その後ミシュラン形式で大問ごとに星をつけ、またその理由をレポートしてもらった。中には実際に一般入試を経験した履修者もあり、年度的にはまったく同じものを経験したのもいたようだった。獨協大学の入試問題は5つの大問から成る。1問目は文法や表現に関する問題、2問目は整序英作文、3問目は長文空所補充問題（補充するのは一文）、4問目は長文問題で日本語での問題が付されているもの、5問目は同じく長文問題でこちらは英語で問題が付されている。問題を実際に解き、評価を決めた後での議論にて履修者たちの間で一番賛否が分かれたのは2問目の整序英作文であった。その理由としては、「2番目と5番目に入れるものの記号を書きなさい」の指示に対して、「それ以外が正しく出来ているかどうかわからない」、「全部（記号を）書かせるべきだ」との意見や、12問という問題数が「多い」という意見もあった。とはいえ、概ね入試問題としては適切ではないか、との声が多かった。なお、当該学部である国際教養学部の合格点に関して見てみると、外国語、国語、地理歴史・公民・数学の三教科400点満点で、選択科目がいずれであれ、大体300点前後が合格最低ラインのため、大変大雑把に換算すると、どの科目も平均的に75%以上の得点率である必要がある。つまり、この英語テストにおいても75%が目安としての合格要件となる、と授業内で示したら、「今やっても合格点に達する自信がないかもしれない」などの声も聞かれた。また、分析するだけでなく試しに問題も作ってみ

ようということで、第1問の文法や表現に関する問題を1問作り、履修者同士で解答してもらおう作業も行った。

さて、こうして分析していると問題の批判ばかりしているかのように受け取られかねないが、授業内で示したかったのはそうした批判ではない。クリティカルに考えることと、その対象を否定することが必ずしも同じでないように、むしろクリティカルに見ることで対象の良い点を客観的に気がつけることもある。この獨協大学の入試問題事例においても、受験者を一定のレベルで判断する問題を作る難しさへの考察が狙いでもある。獨協大学の入試問題も年により、もちろん個々の問題は異なるが、根本的な出題形式、レベルには安定感が保たれている。これは同じことを毎年しているだけのように見えて、実は決して簡単なことではないだろう。例えば、先に紹介したように問題を1問だけ作ってもらったが、履修者たちに「来年の一般入試を全て同じように作ってみる」と言ってすぐに「同じように」出来るだろうか。答えは否であろう。「同じように」作るためには毎年の傾向を詳細に把握し、また受験者層に差をつけるためにも難易度も設定しなければならない。表面的に同じだからといって問題の難易度が同じとは限らない。そう考えると、特定の試験を毎年一定のレベルと内容を維持しつつ作り続けることがいかに大変か、ということがわかる。つまり、分析の狙いはこの活動を通して履修者たちにテスト作成の繊細な部分を理解してもらうことを暗に含ませていたことにある。

このように、ここまでは入試問題を通してテストのあり方、分析などの経緯を見てきたが、次はいわゆる英語資格試験の代表格とも言える、TOEICを用いた活動を報告する。

## 2 テストを解体/再構築する — TOEICを用いて

TOEICが英語テスト市場においてかなりなシェアを占めていることはもはや論を待たない。2015年5月の公開テストが第200回を数えたこと<sup>iv</sup>に加え、2014年度において受験者数も過去最高を記録し<sup>v</sup>、その熱はいまだ冷めそうもない。国際教養学部言語文化学科に所属する履修者たちにとってもTOEICは在学中にプレイスメントテスト含め、卒業までに最低4回は受験せねばならず、またそれ以外でも就職活動などでスコアを求められることは想像に難しくなく、卒業するまでに複数回の受験の機会があることは間違いない。しかし、小手先だけのいわゆる解法テクニク的なことを知ったからといってそれだけで簡単にスコアが上がることはなく、根本的な英語力そのものも求められる。重

ねて言うと、「これさえやれば努力なしにスコアが容易にあがる」などという魔法めいたものもない。ややコンテキストが違うが、柳瀬陽介は2015年5月30日に東洋英和女学院大学にて開催された「英語教育における質的研究ワークショップ」(JACET言語教師認知研究会と外国語教育質的研究会の共同開催)における講演(「質的な実践研究における非合理性・自己参照性・複合性」)にて、質的研究の方法をめぐっての問い、「それでは、実践や研究の成功を保証してくれる一般的な方法はないというのか?」に対し、「その通り。そもそも、実践者や研究者のそれまでの経験や成熟などと無関係に、与えられれば誰でもいい実践や研究ができるようになる方法を求めることは、知性の後退ではないのか。」と答えている<sup>vi</sup>。これはそのままTOEICの対策についてもあてはまると言えよう。つまり、学習者のレベルを無視した特効万能薬的対策などは存在しえないということである。とはいえ、では何もしなくても英語力さえあれば、いつか英語力がどこかで身につけば、スコアが勝手にあがるだろう、というのもやや楽観的すぎるし、それでは当の受験者／履修者たちも、スコアを上げることが必須な状況に追い詰められた場合、何をどうしたらよいのか途方に暮れてしまうだろう。

そこで本演習ではTOEICに限らず、なにがしかのテスト対策をしなければならなくなった際に、ただ単にドリルのように問題集を解いて答え合わせするのではなく、あるいはいたずらに傾向と対策を追いかけるのではなく、これまで見たような入試を分析するといったクリティカルな視線を保つことで対象を冷静に分析、研究し、自ら積極的に取り組むことができるような学習者になれることを目標とした。そのために今回は主にTOEICを対象として用い、その方法を応用してみる、というアプローチを取ったのである。あえて記しておくが、TOEICを分析の対象としたからといって、先に述べたようないわゆる対策講座をしたわけではない。それは上述の通りで、安易で何の努力も伴わないようなスコアアップの方法などあるはずもなければ、おざなりな学習しか行わない安直な対策をとってみせることがこの演習の授業としてふさわしいとも思えないので、そうではなく、あくまで分析の対象であるTOEICというテストに出題される問題が、さらに細かく言えばそれぞれのパートが、何を狙って作られているのか、どんな(英語)力を測ろうとしているのかといった疑問を、問題を解体することで検証し、それらの構造をよく知り、その上で同様の問題を自分自身で作り上げてみる、というクリティカルかつクリエイティブなアプローチを経た上での演習であったことは改めて記しておく。

さて、TOEICを分析、検証するにあたってはこれまでの他のテスト同様、どんなテストなのか、例えば何問あって何分かかるテストなのか、という常識的な前提としての知識をそもそも知っていなければならない。たとえば、「野球ってどんなスポーツ？」と聞かれて、「打ったり投げたりするだけでしょ」としか答えられないようでは、野球を知っている者、ましてや優秀な選手、の答えとは思われぬだろう。TOEICも同じで、「英語を聞いたり読んだりするだけのテストでしょ」程度の認識で高得点者、ということは早々ありえないのではないか。しかし意外にも、これらの事項を的確に、かつ即座に答えられる者は思いのほか少ない。これはつまり、多くの者がTOEICとはどんなテストであるのか、を普段から正確に把握していない／できていないことを意味するのと同時に、高得点者（895点以上）が全受験者の3～4%しかいないこととも関連していると言えるだろう<sup>vii</sup>。そこで授業では全体像を把握するための基本情報はこちらから解説として講義、そして各授業時には対象とするパート毎の特徴を概観し、その上でそれぞれの特徴を踏まえ、類似的問題の作問を毎回の課題とした。以下、パート毎にそれらの過程を簡潔にまとめておく。なお、TOEICの問題冊子は持ち帰りが禁止されており<sup>viii</sup>、文字通りの「現物」は入手できるはずもないので、IIBC（国際ビジネスコミュニケーション協会）が発行している公式問題集vol.6とETSのウェブサイト<sup>ix</sup>を参考資料の原本、基準とした。また、履修者たちは何もTOEICの専門家でもなければ、また専門家を目指しているというわけでもないので、個人として学ぶことも出来るが話し合いなどのコミュニケーションを経ての作業のほうがより情報や知識を共有でき、かつ相互に学びあえる機会が多いだろうとの判断から、21名の履修者を3人1チームの計7チームに分け、この演習においては基本チーム毎に活動してもらうことにした。なお以下の報告に関して、TOEICにあまり詳しくない方は上記の公式問題集かETSのウェブサイトを参照されつつお読みいただくとより理解しやすい。

最初はわりと特徴をつかみ易い、Part 5から始めた。Part 5は文中の空欄に適する語を4つの選択肢から1つ正しいものを選ぶ問題で、問われる項目としては文法、語彙に関する問題が40問出題、その比率は語彙が11～14問、それ以外の26～29問は文法問題となっており、文法と語彙、両方の知識が必要となる。まずは数問、サンプルとしての問題を提示したのち、問題文の傾向、問題の作り方を検討した。Part 5の問題文はどれも一文であるが、決して短いわけではなく、長いものだと25語近くも使われている。ここがTOEICの特徴で

もあり、全文を丁寧に読んでゆっくり解答しようとするといわずらに時間を取られ、他のパートが最後まで終わらなくなってしまう。参考までに記すと、リーディングセクションの解答時間は75分、後に登場するPart 6とPart 7と合わせて合計100問、を解かなければならない。まともに考えて、1問1分かけたら時間内に解答し終えることはできない。よって作問上のポイントは、問題の意義と出題の意図を理解した上で問題文、さらには選択肢を作るかというところにある。また、文の内容としてはビジネスを匂わせるものもあるが、逆に殺人や犯罪などの内容は決して現れない。より細かく出題内容を見ていくと、文法の場合は品詞、代名詞の格、前置詞、接続詞などが狙われ、語彙の場合は副詞ならば違う意味の副詞が4つ並列されるケースが多い。なので、まずは問題を見た際には選択肢を眺め、文法と語彙、どちらが問われている問題なのかを把握する必要があるし、作る際もそれを踏襲しなければならない。逆にこの規則に則っていない、(A) beautiful (B) beauty (C) pretty (D) prettierのような、単語も品詞もごちゃ混ぜのようなものはPart 5の選択肢としてはふさわしくない。

この点をおさえた上で、チーム毎に6問（上記の出題比率を大雑把に踏襲し、文法4問、語彙2問）、作ってみるようにと指示した。先に説明したように、1チーム3名なので2問ずつ、誰が文法を担当し、語彙を担当するかは各チームに任せた。提出方法は、Eメールにてチームのキャプテンが授業日前日の水曜日午前9時まで提出することとし（以後、提出方法はこのスタイルと期日を踏襲）、その後期限までに集まったメール、もしくはファイルをこちらで整理、編集し、翌日の授業の際にプリントとして配布、合計42問をその場で解き、各チームが答えや簡潔な解説を述べた後で、どれが一番本物っぽいのか、つまり説明された方法を遵守して作成できたか、を投票してもらった。全員分のものを比べてみるとやはり大なり小なり差が出るもので、チームによっては文法と語彙の比率が崩れていたり、上記の例のように2種類の単語の派生形があったり、あるいは問題文そのものが文法的に不成立、また問題以外のところの記述で選択肢が(A)ではなく1, 2のような数字になっている、など様々なミスがあったが、そうしたものを比較しつつ、どれが一番本物っぽいかを精査することでそうしたミスに気がついた、という履修者もいたので、始めとしてはそうしたミスを含め、自分で作問する難しさを学べたという意味でよい機会であったと言えるだろう。

Part 6はメール、手紙、メモ形式の文書に3問の設問が付されたものが4つ、

計12問出題される。ポイントはPart 5の時と同様、まずはその3問の設問がどういったことを問うているのか、を把握するところにある。そうした上で検証していくと、3問が2種類の形式に分けられることがわかる。ひとつは独立型（Independent Question）であり、簡単に言えば文法問題である。文法を問うているので極端な話、その部分ないし前後さえ読めば答えは比較的自ずと判明するタイプの問いである。いわば、先に見たPart 5の文法問題が文書中に埋め込まれたようなものである。もうひとつは文脈型（Context Dependent Questions）で、英文をきちんと読み、前後関係など文脈の流れを理解できているかを問う問題である。こういうタイプの問題では、接続詞や代名詞なども狙われる。よってこの2種類を時間内に素早く、かつ正確に処理できる英語力が必要となる。なお、2種類の出題比率はIDQが1問、CDQが2問、というのが定石なので、作問の際もその比率を保つようにと指示した。さすがに問題文の英文から全て作るのは大変なので、問題文はこちらで3タイプ異なるものを用意し、それをチームに配布、チームの中でその3つのどれを担当するかを検討し、作成後キャプテンが先のPart 5の際と同様の要領でEメールにて提出、とした。つまり、今回は3タイプの問題が7問ずつ出来上がることになる。これらを、またこちらで整理、編集し、同一タイプ7問がA4サイズの紙1枚に両面でおさまるように縮小コピーし計3枚（3種類）準備し配布、次回の授業でこれら全てを全員で解き、出題者が答えと簡単な解説をしたのち、タイプ毎でどれが一番よくできていたか、を投票した。また、投票後にはこのモデルに使用した英文に対するオリジナルの問題と練習問題を紹介し、各自の作問と出題箇所とを比べてもらった。それらと同じような問題を作れることが必ずしも優秀であるとは言い切れないかもしれないが、出題ポイントなどは大いに参考になったことだろう。

Part 1 はリスニングセクションの最初の問題で、問題冊子に印刷された写真を見て、放送される4つの英文（それぞれ1センテンス）のうち、写真の描写として正しいものを一つ選ぶもので、毎回10問ある。狙いは写真の描写に関する表現を知っているか、またそれを正確に聞き取れるか、にある。ここではやはり写真が重要なのは自明であり、写真にもそれなりの傾向、法則があり、どんな写真でもよいというわけにはいかない。人物（一人／二人／三人以上）が写っているもの、モノ（調理器具や乗り物など）が写っているもの、などに分類できる。放送される英文も、全くでたらめなものが4つ放送されるというわけではなく、文の構造、長さは往々にして類似しているものが多い。な

ので、例えば (A) They are ... (B) He is ... (C) She is... (D) All the people are ... といったようなことにはならない。よって、Part 1 を作問する際は、このように写真の適切さと問題文のレベルがセットでポイントになる。今回は、提出はチーム毎ではあるが、一人1問(写真と英文のセット)を作成してもらったことにした。また出題の際、ナレーションも自分たちでやってもらい、出題者以外は全員そのナレーションをもとに解答するというスタイルをとった。配布資料としてはまず写真のみのものを配布し、上記のやり方で出題／解答してもらい、その後読み上げた英文のリストを配布した。写真と選択肢である英文との整合性、選択肢のみの妥当性などを吟味してもらうためである。なお、このPart 1 の演習を行った日は授業内で70分ほどTOEFL ITP<sup>x</sup>のリサーチテストをやった後での活動だったので、問題を出題、解答することのみを短時間で言い、どれが一番秀逸であったかの投票は先に配布した資料をよく見比べ、メールにて実施、回収し、次週の最初に結果と講評を行った。

Part 2 は放送される質問文に対し、その受け答えとして正しい応答を3つの選択肢のうちから1つ選ぶもので、30問出題される。質問文をスクリプトとして読むとすぐに気がつくが、疑問詞で始まる疑問文が多い。具体的には、When / Where / Why / What / How...などである。逆に言うと、この冒頭を聞き逃し、あるいは聞き取れずに、WhenかWhereかが混同してしまうと非常に答えにくいし、自信を持って選択肢を選べない。リスニング問題だけあって、ここは非常に集中力を要される。作問にあたっては、それを踏まえた上で不正解の選択肢にそうした要素を取り込む(場所と時間の選択肢を併設しておく)と難しくなる。また、似たような発音の語、例えばcoffeeとcopyなどのような語、を織り交ぜておく事でひっかけしやすくなったりもする。課題としては1問分の質問文と選択肢を作成し提出、またPart 2 は質問文も選択肢も問題冊子に印刷されていないので、授業内では今回も出題者にナレーションをもらい、全員分の出題と解答を終えたところで、スクリプトとして両者をまとめたものを配布した。投票はこのスクリプトを吟味し、行った。

Part 3 は会話(通例男女の組み合わせで、A→B→A→BないしA→B→A)を聞き、その内容に関する問いが3つあるものが10セット、計30問のセクションである。会話の内容としては、二人の間に何がしかのトラブルがあり、それを一方の話し手が投げかけ、それを受けてもう一方が解決策を示す、どのように、会話の流れ、組み立て方にある程度パターンがある。よってそもそもの英語リスニング力に加え、こうした会話の流れを追える能力も問われていると

言えるだろう。また、問いの分析だが、出される3問の問いは大きく分けて2つのタイプに分かれる。ひとつは、いわゆる会話の全体に関する問い(ex. Where are the speakers?)で、もうひとつはピンポイント、つまり会話中に一度のみ登場する情報に関する問い(ex. What does the man do next?)である。これらは通称、森問題(全体)と木問題(ピンポイント)と呼ばれるが、出題比率は1:2のことが多く、前者は3問中の1問目に来ることが多い。また、全3問の問いは会話の流れに沿って出題されていて、3問目のヒントが会話の冒頭にあった、などということは滅多になく、むしろ先の例のように「次に何をするのか」など会話の後半に登場する、次の行動を問う問題であることが多い。つまり、3問の問いはちゃんと会話聞いていれば順番通りに答えられる仕組みになっている。加えて、同じ箇所が2つの問題のヒントになっていることも稀で、通例問われるポイントは会話中の異なる箇所に分散している。選択肢の作成にあたっては、問題の例をいくつか見ればわかることだが、Part 1同様、形の上では揃っていることが多い。例えば、Whereで始まる疑問文の選択肢としては、(A) At ... (B) At ... (C) At ... (D) At ...が理想的で、(A) At ... (B) On... (C) In... (D) He is ... のようにはあまりならない。

このPart 3の作成においては、Part 6同様、会話文そのものはこちらから用意したものをスクリプトの形でプリントとして渡し、チームでそのひとつの会話に対し問題3問(各自1問)を作ってもらうことを課題とした。ただし、全部同じ会話では教室で出来上がった問題を解く際に退屈してしまう可能性があり、逆に全て異なる会話では解答の際に21種類もの会話を聞くことになって大変であると予想されたので、4つのタイプをあらかじめ用意し、合計7チームなのでうち3つのタイプは2チームが担当、1つのタイプのみ1チームだけが担当(8チームあれば均等に全タイプ2チームずつ担当できたのだが)、とした。課題として作ってもらった問題はEメールで回収した後、タイプ毎に整理、編集して授業にて配布、その場で解答してもらった。また、これまでのPart 1, 2同様、このPart 3でもナレーションは各自で担当、それを聞きながらの解答、という方法をとった。その後で、各チームにそれぞれ解説を加えてもらい、全タイプを通してどれが一番よい設問と選択肢であったかを投票した。なお余談ではあるが、Part 3と次に紹介するPart 4を解くにあたっては、会話を聞く前に問題文を読んで何が問われるのかをあらかじめ知っておく、いわゆる「先読み」も大切とされている。しかし、これは解法上のテクニックのようなものなので、一応紹介しておきはしたが、それを解答の際に実践するか

しないかは各自の判断とした。

Part 4はPart 3と異なり、一人のナレーターによるトークやアナウンスを聞き、それに関する設問3つに答えるものが10セット、計30問のセクションである。ただし、Part 3と問題の作り方はそんなに変わらず、先に紹介した形式、全体を問う問題とピンポイントの情報を問う問題に分類できること、また流れてくる順番に沿って設問は作られ、ヒントとして参照すべき箇所が分散していること、などはほぼ共通している。よって今回も前回同様スクリプトを4種類こちらで用意し、Part 3の時と同様、合計7チームなのでうち3つのタイプは2チームが担当、1つのタイプのみ1チームだけが担当し、それらのスクリプトに関する問題を3つ作成し、Eメールで提出してもらった。集まった問題を授業で解答する際はこれまでのリスニング問題でも行ってきたように、各チームに音声朗読も担当してもらったが、今回のPart 4はナレーションとしては一方的にわりと長めに話すパートであるせいか、Part 2やPart 3に比べて、流暢に読むのが難しい、途中でつかえる、言いよどむ、といった様子がこれまでになく散見された。音読とリスニングの関係をここで詳細に述べるのは差し控えるが、そうした決して流暢とは言い難いナレーションを改善するには、正しい音声認識と発話の練習も重要であろうと感じたので、問題を解く作業とは別途、急遽スクリプトそのものを声に出して読む練習も若干行った。加えて、これまでの過程で問題作成そのものには慣れて来た部分がある反面、基本的なミス、例えば問題文が非文法的といった問題が目についたので、そうした部分にも改めて注意を払うよう促した。解答後の投票を行ったのはいつもの通りである。

Part 7はリーディングの最後のパート、いわゆる読解問題として分類される48問が登場するセクションである。主にメールやメモを読み、その内容に関する質問に答えるという、一見シンプルな箇所でもあるが、形式上の分類としては2種類、つまりシングルパッセージ (SP) と呼ばれる1文書のみの問題が9題 (設問は2～5問) と、ダブルパッセージ (DP) と呼ばれる両文書参照型の問題が4題 (設問は各々につき5問) 存在する。これら2種類を一度にまとめて授業でやってしまうのはやや大雑把になりかねない懸念があったので、SPとDPをそれぞれ1授業ずつあてがうことにした。

SPでは主な設問文の例、目的や主旨を問うもの (ex. What is the purpose of …?) や、推測して答えるもの (ex. What is suggested about …?) があることを紹介、またPart 3, 4同様、大概の設問は本文を上から読んでいく順番

に作られるという原則があることも紹介した。上述のようにいわゆるリーディングなので出題のねらいは英文読解力を問うている事は明らかではあるものの、難関大学入試問題の英文に見られるような、複雑な構文などは見かけられない。それよりもむしろいかに短時間で書かれてあるものを把握するかといった速読かつ精読力が問われている。それは問題作成にあたってのポイントとも関連するのだが、TOEICは時間をかけてゆっくり解くテストではないので、時間をかけないと解けないような問題、つまりは解答への手がかりが見つけない、明示されていない、あるいは何度も文書を読み直さないといけない問題、は難しいと分類される。逆に一読してわかる問題、ヒントあるいは答えそのものが文書にはっきり登場している問題、は易しいと言える。なお、特徴的な問題としては本文中に書かれていないものを問うNOT問題 (ex. What is NOT indicated about …?) がある。本文中に示されていないものが問われているので、示されているものを確認せねばならず、時間もかかるし、難しい。こうした要素を、全体を通してバランスよく配分するのは相当高度なので、そうしたことまで今回の課題で期待、要求はするべくもないのだが、どういう問題が簡単で、あるいは難しく、の意識は作成時にあってもよいだろうと考え、説明だけはしておいた。今回は問題作成にあたり、3種類の英文を用意した。それらをチーム毎ではなく、チーム内にて3人で分配、そしてそれぞれの英文に対して1人が3問ずつ問題を作る、ということにした。つまり、一つの英文に対して各チーム分(7名分)、計21問の問題が出来上がることになる。回収方法などはこれまでと同じだが、教室で解く際は担当した者以外にはその場で英文を渡し、読んだ上で7種類21問を一気に解答してもらった。解答する順序によっては設問が重複してしまうことも考えられたが、設問の良し悪し、妥当性などを吟味する上では逆に比較しやすいと判断し、そのようにした。実際にやってみると、似たような問題、特に主題を問うような問題は重複していたり、目立ったキーワードには設問が集中する傾向も見られた。その一方、問題文と選択肢のパラフレーズが若干飛躍しすぎていたり、問題文以外の常識(地名や国名など)を問うといったような、本来のTOEICからするとやや逸脱気味のものもあり、そうしたものはこちらから指摘、あるいは履修者同士で質問させるようにした。逆に秀逸だったのは、旅行日程表から時間や日付を計算させるような問いは英文をただ読んだだけでは解けないので、賢い問題として評価された。

最後はDPの問題作成演習なのだが、DPを始める前に、TOEICをプレイスメ

ントであれ公開模試であれ、「最後の問題まで時間内に解き切れたか」、との質問をしたところ、大半は「終わらない」と答え、DPまで手が回らない、あるいは文書が2つあるので難しそうだからやらすじまいにしてしまう、との声が聞かれた。そういう意味では、受験者にとって一番いやな、面倒くさそうに思えるセクションである。しかし、問題をよく見てみると、そこまで難しいわけでもない。というのも、DPには全て5問ずつ設問が付されているが、その5問共が両文書を読まないで解答出来ないわけではないからである。特に、それぞれの問題の1問目はほとんど最初の文書さえ読めれば解答できる問題であるし、必ずと言っていいほど4セットのどこかには同意語問題（本文と同じ意味の単語を選べという主旨の問題）が含まれている。こうした分類をしていくと、実は両方の文書の情報を関連づけないと答えられない設問はそれぞれのセットの中で1、2問にすぎないことがわかる。いわゆる対策セミナーなどでは、こうしたことから「DPではわかる問題だけやればいい」とアドバイスすることもあるという。それはさておき、問題作成にあたってはこれらの法則、中でも特に、全ての設問が両文書に関するものでなくてよいことを説明し理解してもらった。本来であればDPなので両文書に対して5問の設問を作るのが望ましいのだが、一人で5問作るのはやや大変であろうということと、授業時間内に作った全問を解き終わられるだろうか（21人が5問を作ったとすると105問を90分以内に解かなければいけない計算になる）という点が懸念されたので、前回のSP同様、3種類のDP用英文（それぞれ2つの英文がセット）をこちらで用意、それら7チーム内にて3人で分配、それぞれに対して1人3問ずつ問題を作成、基本的にはうち1問は最初の英文から、1問は両文書参照型で、もう1問は二つ目の英文から、出題するようにと指示した。よってクラスとして一つのDP文書に対して計21問の問題が出来上がった。それらを次の授業で解きあい、解説するというプロセスはSPの際と同様に行ったが、予想はしていたものの、履修者たちは両文書参照型の問題を作るのに苦戦していたようであった。

### 3 評価方法と履修者からのフィードバック

ここまでパート毎の報告を記してきたが、評価と履修者からのフィードバックについても触れておきたい。本演習の評価方法はシラバスに記載した通り、Class Assignment & In Class Performanceが70%、Final Test, Paper or Presentationを30%、とした。Class Assignment & In Class Performanceに関してはセンター試験分析などのミニレポートや毎回のTOEIC問題作成の課題

提出状況、内容の精度で評価し、合計点として算出した。Final Paperについては、問題作成と自己評価、ならびに、問題解説のレポートを書いてもらった。具体的には、問題作成はPart 1, 2, 5でそれぞれ3問、3問、4問の合計10問分なのだが、すでにこれまでの授業内に課題として作ってあったもの、Part 1, 2は1問ずつ、Part 5は2問、も改訂の後、計10問分に含めてよいとした。ただし、含めるにあたっては授業内での作成ポイントやコメント、他の履修者からのフィードバックなどを加味して改訂すること、が条件ではある。残りの問題は新規に作成し、合計して上記問題数になるよう指示した。Part 3, 4, 7 (SP, DP) は作成にあたり新たな英文がないと出来ないということもあり、各自が課題で作ったものを先と同様振り返り、改訂しつつ、問題を作成する際に狙ったところや、解答する上でのポイントを解説として書く、ということにした。これらを内容、レベルでもって評価し、上述のClass Assignment & In Class Performance分の点数と合算し、最終評価点を出した。

すでに紹介してきたように、TOEICの問題作成演習になってからは3人1チームでの活動が多かったせいか、21名とも途中で履修放棄といったようなことは一切なかった。その点はグループ活動が功を奏した一面であったと言えるだろう。

なお、今回の演習に関する授業アンケートを行ったのでその結果と分析を記しておく。質問項目はAppendix 1にある通りで、回答数は19名であった。なお、ここでは主な項目、結果のみ報告する。(1)の英語力に関しては、16名が「とても上がった」、「やや上がった」、と回答した。理由としては、「問題を作成することで、英文を読まなければならない、文法を理解した、同義語を学べた」などが挙げられ、テストを分析、作成することで英語そのものと真剣に対峙し、結果として学習の質が向上したことは紛れもない事実である。(3)の英語テストへの関心のきっかけでは、18名が「とてもなった」、「なった」、を選び、「TOEICをちゃんと受けてみようと思う」、といったような前向きなコメントもあった。これはおそらく、分析をすることで対象そのものへの関心が増したことの表れと見てよいだろう。(4)の自分でテスト作成することへの質問は、同じく18名が「とても良い」、「まあまあ良い」、を選んでいる。理由としては、「テストを作ることでテストへの理解が深まった、出題者の側に立つことでポイントがわかった」とあり、作るためには理解せねばならず、それが結果として学習、もっと言うとは実は最大の対策、になりえたことを示唆している。なお、Final Paperにもこの演習を通して学んだことへのコメントがいくつかあった

ので、それらをAppendix 2として付してある。また、Appendix 3はほんの一部ではあるが履修者たちが作った問題のサンプルなのでこちらも合わせて参考にされたい。よって、これらのアンケート結果、コメントから察するに、当初掲げた目標、「クリティカルな視線を保つことで、対象を冷静に分析、研究し、自ら積極的に取り組むことができるような学習者を育成する」は今回の演習授業を通して大方達せられたと言ってよいだろう。

## おわりに

このように、本報告では都立入試問題を筆頭にテスト分析、研究を始め、TOEICをパートごとに吟味し、最終的に各自で問題を作成する、という一連の授業の過程を紹介した。ややもすると単なる一趣味趣向を反映したものにすぎないと映ってしまうかもしれないが、この授業を通して伝えたかったメッセージは、本報告中にも記したように、TOEICであれ何であれ、対象をよく見て分析し、たとえその過程で誰かに聞いたとしても、自分でよく研究してみること、であった。あるテストを表面的に見ていただけでは、また受け身的に解いている、解かされている、だけではそのテストの狙いや作り方まではそんなにわからないだろう。逆に、対象を徹底的に分析し、自分でそれに似たものを作成してみるというプロセスを経ることで初めて、その対象がいかなるものであるかに気づくことができる。これはなにもTOEICに限らず、TOEFLやIELTSといった他の英語試験でも、もっと広く言えばどんな研究対象にも、あてはまる着眼点と研究方法ではなかろうか。それはある料理を特に何も考えずただ食べているだけなのか、それとも自分でもレシピを参照し調味料の微妙な加減にまで気を配って工夫を凝らして作ってみるのか、では大きな違いがあるのにも似ているかもしれない。今回履修してくれた学生たちが上記のような姿勢を保ち、今後いろいろな分野において積極的に活躍していってくれることを祈りつつ、本報告のおわりとしたい。

## Appendix 1 Questionnaire for English Seminar 2015 spring

英語演習の授業と授業内で扱ったテストについて答えて下さい。授業効果を確認し、今後活用させるためのアンケートです。個人を特定されない形で集計されます。成績には一切関わりませんので、思った事を自由に記述して下さい。また、この結果は英語教育の論文に掲載される事がありますので、ご了承下さい。あなたの感想に最も適する答えの番号に○をつけて下さい。四角の枠内には感想や答えの理由をお願いします。

(1) このテストを分析する、作成する授業を通じて英語力が上がったと感じますか。

1 とても上がった 2 やや上がった 3 変わらない 4 やや下がった 5 とても下がった

(2) この英語演習のレベルはあなたにとって易しかったですか。

1 とても易しい 2 やや易しい 3 ちょうどよい 4 やや難しい 5 とても難しい

(3) この英語演習は英語テストへの関心を高めるきっかけになりましたか。

1 とてもなった 2 ややなった 3 どちらとも言えない 4 あまりならなかった 5 全くならなかった

(他にどのようなテストを今後研究してみたいか、また取り組んでみたか、など)

(4) いわゆるテスト対策をするのではなく自分でテスト問題を作成してみることをどう思いますか。

1 とても良い 2 まあまあ良い 3 どちらとも言えない 4 あまり良くない 5 全く良くない

(5) TOEICは他の英語の試験と比べて取り組みやすいと思いますか。

1 とても取組易い 2 取組易い 3 どちらとも言えない 4 取組にくい 5 とても取組にくい

(取り組み易さ、取り組みにくさの原因があればそれらを具体的に書いて下さい)

(6) テスト問題を作る課題について答えて下さい。

Reading 能力： 1 とてもついた 2 ややついた 3 変化なし 4 やや下がった 5 とても下がった

Writing 能力： 1 とてもついた 2 ややついた 3 変化なし 4 やや下がった 5 とても下がった

Speaking 能力： 1 とてもついた 2 ややついた 3 変化なし 4 やや下がった 5 とても下がった

Listening 能力： 1 とてもついた 2 ややついた 3 変化なし 4 やや下がった 5 とても下がった

(7) 作った問題を解く、出題する、ことについて答えて下さい。

Reading 能力： 1 とてもついた 2 ややついた 3 変化なし 4 やや下がった 5 とても下がった

Writing 能力： 1 とてもついた 2 ややついた 3 変化なし 4 やや下がった 5 とても下がった

Speaking 能力： 1 とてもついた 2 ややついた 3 変化なし 4 やや下がった 5 とても下がった

Listening 能力： 1 とてもついた 2 ややついた 3 変化なし 4 やや下がった 5 とても下がった

(8) その他コメントがあれば自由をお願いします。

## Appendix 2

・問題をつくることで一番難しかったのは不正解の選択肢を作ることでした。全くまとはずれな選択肢ばかりだと問題が簡単になりすぎてしまうので、ひっかかってしまうような選択肢も作ろうとしました。そのときに、あまりに正解とかけ離れてしまうことや、正解に近すぎて考え方によっては正解になってしまいそうな選択肢も作ってしまうことも多かったです。言い換えをするときには語彙が足りなくて似た意味の単語を探すのは苦劳しました。大変だったけど調べながら問題作成をしていたので、言い換えの単語をたくさん知ることができました。

・問題を自分で作成することで、問題の傾向や対策を理解することができたと思う。自分で事前に対策をしておけば、予測して試験等に挑むことが可能なため、自然と回答のペース配分ができるようになった。それはたとえTOEICであってもセンター試験の問題であっても都立の入試問題でも同じであろう。また、試験の作成側の人たちの気持ちが少しだが知れたことは自分にとってとても良かった。どういう狙いのもとに、どのような工夫を凝らして問題があるのかを考えながら問題を解くことは、ただ何も考えずに解くよりも面白かったし、作成者の方々が創意工夫をしながら問題を出題しているのだと思うと、英語は奥が深いのだと感じる。

・高校の入試問題からセンター試験、獨協の過去問、TOEICと様々な問題を分析したり、自分で問題を作ることによって、出題者の側からのねらい目や、意図を考えることができた。それは今後、問題を解くうえで役立つと思う。問題を作るのは難しかったけれど、独自の問題を作ろうと、工夫したり、考えたりするのは楽しかった。

## Appendix 3

### Part 5 sample

103. After a several discussions, we finally earned the committee's \_\_\_\_\_.

- (A) approve
- (B) approval
- (C) approving
- (D) approvingly

### Part 2 sample

13. When will you need these books?

- (A) At the new bookstore.
- (B) By the deadline for a paper.
- (C) I lost the same books.

## 参考文献

大学入試センター試験

[http://www.dnc.ac.jp/data/shiken\\_jouhou/h26/jisshikekka/honshiken\\_mondai.html](http://www.dnc.ac.jp/data/shiken_jouhou/h26/jisshikekka/honshiken_mondai.html)

獨協大学2014年度入試 入試問題集

Dokkyo University Guide Book 2015 Wissenschaft

Educational Testing Service、TOEICテスト新公式問題集 Vol.6、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会、2014年。

Lyle F. Bachman and Adrian S. Palmer. *Language testing in practice: designing and developing seful language tests*. Oxford University Press. 1996. Print.

渋谷奈津子、横川綾子『TOEIC®テストいきなり600点!』、アルク、2013年。

ヒロ前田、ロバート・ヒルキ『新TOEIC®テスト直前の技術』、アルク、2007年。

- 
- i <http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/2015/pr150224n-mondai/27e-houshin.pdf>
  - ii [http://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00003229.pdf&n=%E5%B9%B3%E6%88%9026%E5%B9%B4%E5%BA%A6\\_%E7%AC%AC%EF%BC%91%E9%AB%98%E6%A0%A1%E6%84%8F%E8%A6%8B%EF%BC%88%E8%8B%B1%E8%AA%9E%EF%B0%88%E7%AD%86%E8%A8%98%EF%BC%89%EF%BC%89.pdf](http://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00003229.pdf&n=%E5%B9%B3%E6%88%9026%E5%B9%B4%E5%BA%A6_%E7%AC%AC%EF%BC%91%E9%AB%98%E6%A0%A1%E6%84%8F%E8%A6%8B%EF%BC%88%E8%8B%B1%E8%AA%9E%EF%B0%88%E7%AD%86%E8%A8%98%EF%BC%89%EF%BC%89.pdf)
  - iii [http://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00003231.pdf&n=%E5%B9%B3%E6%88%9026%E5%B9%B4%E5%BA%A6\\_%E7%AC%AC%EF%BC%93%E4%BD%9C%E6%88%90%E9%83%A8%E4%BC%9A%E8%A6%8B%E8%A7%A3%EF%BC%88%E8%8B%B1%E8%AA%9E%EF%BC%88%E7%AD%86%E8%A8%98%EF%BC%89%EF%BC%89.pdf](http://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00003231.pdf&n=%E5%B9%B3%E6%88%9026%E5%B9%B4%E5%BA%A6_%E7%AC%AC%EF%BC%93%E4%BD%9C%E6%88%90%E9%83%A8%E4%BC%9A%E8%A6%8B%E8%A7%A3%EF%BC%88%E8%8B%B1%E8%AA%9E%EF%BC%88%E7%AD%86%E8%A8%98%EF%BC%89%EF%BC%89.pdf)
  - iv <http://www.toeic.or.jp/toeic/guide01/schedule.html>
  - v <http://www.toeic.or.jp/press/2015/p038.html>
  - vi [http://yanaseyosuke.blogspot.jp/2015/05/blog-post\\_27.html](http://yanaseyosuke.blogspot.jp/2015/05/blog-post_27.html) (スライド42/43)
  - vii [http://www.toeic.or.jp/toeic/about/data/data\\_avelist/data\\_dist01\\_12.html](http://www.toeic.or.jp/toeic/about/data/data_avelist/data_dist01_12.html)
  - viii <http://www.toeic.or.jp/toeic/guide02/guide03.html>
  - ix <https://www.etsglobal.org/Tests-Preparation/The-TOEIC-Tests/TOEIC-Sample-Tests/TOEIC-Listening-and-Reading-Sample-test>
  - x 国際教育交換協議会 (CIEE) が主催するTOEFL ITPテストレベル2リサーチテスト、既存のフォームとリサーチフォームを2週続けて受験 (試験時間70分) するものを授業内で実施した。